

序章 海獣狩猟文化における動物飼養研究の意義

1. 海獣狩猟文化の位置

北東アジアは、ユーラシア大陸の東部に位置し、その広大な大地には、アムール河やレナ河などの大河が貫流する大平原や針葉樹林帯（タイガ）の他、大シアンリン山脈（大興安嶺）やシホテアリニ山脈などの山地が広がる。さらに、前記の大河に加えて、西部にはバイカル湖、東部にはオホーツク海や日本海を擁するなど、水域環境にも恵まれている。気候区は、東シベリアの一部を除いて亜寒帯（冷帯）に属しており、広葉・混交樹林帯から針葉樹林帯が広がる。この地域には、トナカイやアザラシなどの北方系の動物群が多数生息しているが、より南部の地域では南北両系統の動物群が生息する緩衝地帯となっている（徳田 1969）。

北東アジアの先史文化の展開については、すでに大貫静夫氏（1998）や臼杵勲氏（2004）らによってその概略が示されている。それによれば、東シベリアを除いた北東アジアでは、更新世末期の温暖化に伴う環境変化の中で、土器製作が始まり、水産資源利用の比重が増し、竪穴住居が一般化するなど、遊動生活から定住生活への大きな転換が図られたとされる。その後、雑穀農耕を行う地域が南部から拡大しはじめ、紀元前 1 千年紀後半までには、アムール河下流域や、日本列島では東北地方でも農耕の痕跡が認められるようになる。一方、これより北部の地域では、豊富な水産資源を背景とし、前時代から続く狩猟採集文化をより一層発展させる方向へと志向する。海獣狩猟文化は、狩猟採集文化が継続した地域のうち、オホーツク海の沿岸部を中心に確立を見た文化である（図 1）。

本研究では、サハリンから北海道の沿岸部に分布し、水産資源に依存したオホーツク文化（註 1）を中心に、検討を進めることとする。この文化は、主として海洋性の水産資源の獲得技術をはじめとする海洋適応の度合を高める一方で、アジア大陸と日本列島との間に位置するその地理的・文化的状況から、大陸と列島双方に形成された農耕国家社会やその周辺文化との接触の過程で鉄器類の確保を図るなど、「狩猟漁撈技術と文明圏との関わりが織り成す密接な相互作用」（前田 2002：1 頁）を軸として、展開を遂げたことで知られる。このオホーツク文化に関する研究は、これまで、分布域の南部にあたる北海道側での調査・研究成果に依拠する部分が多く、同文化の主要部分を包蔵するロシア側の成果については、十分活用しているとは言い難い状況にあった。しかるに、1991 年のソ連邦解体以後活発化した国際的な共同調査や研究活動によって、日露両国で互いに公表される資料の数は飛躍的に増加しつつある。なお、当地域で海獣狩猟文化としての体制の明確な確立を見るのはオホーツク文化のみであるが、その文化要素の中には、銜頭に代表される海獣狩猟技術をはじめ、先行する続縄文文化に由来する要素が少なくないことは、すでに指摘されることである（前田 1976、1999）。

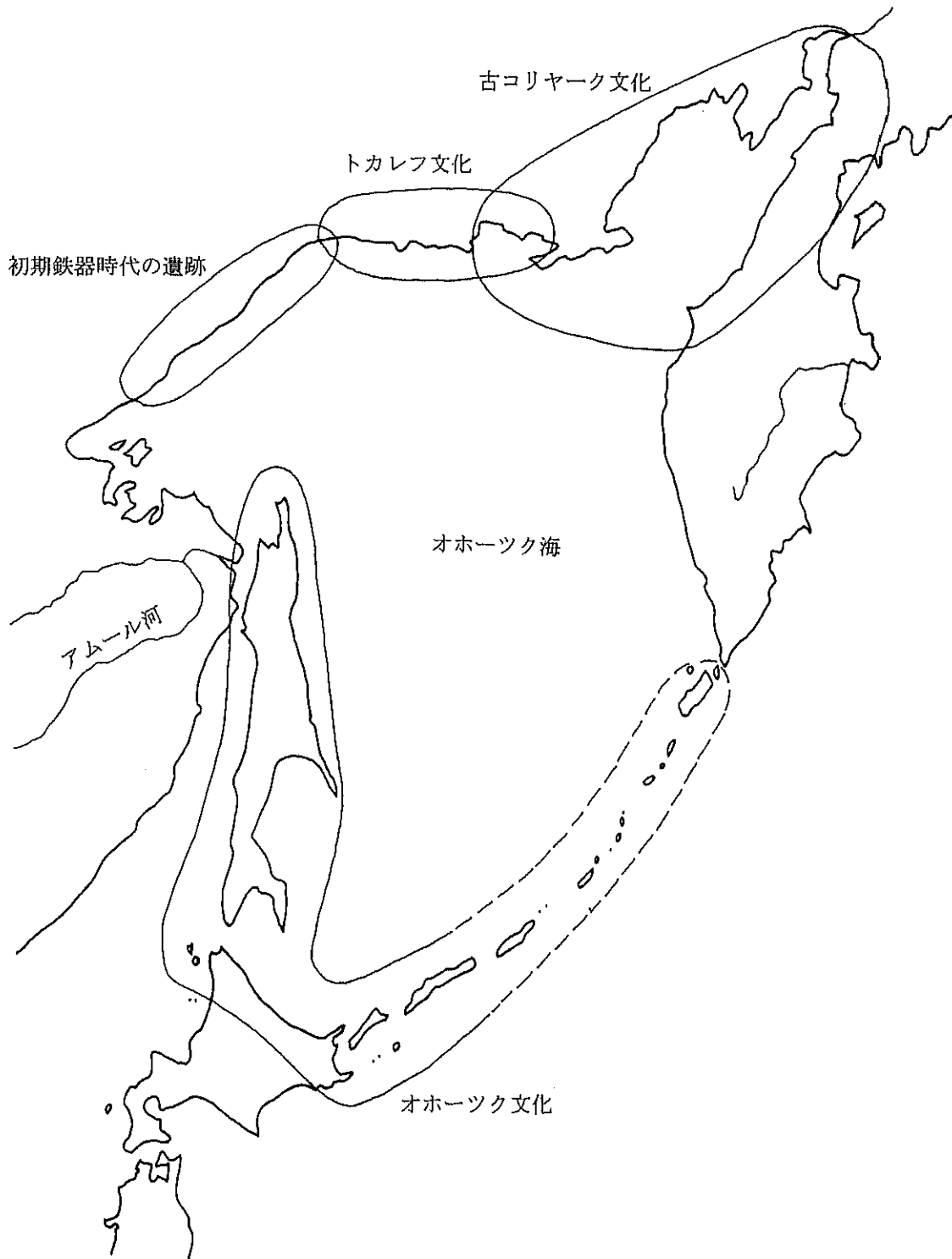


図1 北東アジア沿岸の海獣狩猟文化 (菊池 1993 を基に作成)

本研究では、海獣狩猟文化の成立前後に生業体系に新たに組み込まれた動物飼養の時期的変遷や地域差、文化内における位置づけ、その背景にある周辺文化との関わりなどの検討を通じて、動物飼養が海獣狩猟文化の成立や発達過程に果たした歴史的役割について明らかにすることを目的としている。そのため、海洋適応の度合を高めていく縄文時代から海獣狩猟文化として確立したオホーツク文化期を中心に検討を試みることにする。ただし、動物の家畜化を証明するためには、それ以前の利用内容との差異を見出す必要があるため、北海道の例に限って、縄文時代についても検討対象に含めることとした。

2. オホーツク文化の生業

北方狩猟社会の生業については、前田潮氏（2002）がすでにまとめているように、ワシリエフスキー氏（Васильевский1971）やフィッツヒュー氏（Fitzhugh 1975）によって諸類型の提示が試みられている。それによれば、北方狩猟社会において、海獣狩猟のみで生計を立てている社会は存在せず、海獣狩猟の占める位置や役割には多様性のあることが明らかである。現在までのところ、海獣狩猟文化を規定する統一的な見解はないが、イエスナー氏（Yesner1980）によって便宜的に規定された「食料のカロリーまたは蛋白質の摂取量において海獣類が最大比率を占める」という概念に相当する可能性のあるのは、ワシリエフスキー氏による「沿海群」やフィッツヒュー氏による「海洋型」のみであり、そこに含まれるのは、アリユート（Antropova1956b）（註2）のような高緯度地域に居住する一部の社会に限られる。これに対して、海獣類がカロリーや蛋白質の摂取量の主体は占めないながらも、海獣類への依存性が比較的高く、海獣狩猟や漁撈、陸獣狩猟、動物飼養などが複合した生業の類型がある。オホーツク文化もこれに含まれるが、この文化を摂取カロリーの8割以上を魚類が占めるという動物遺存体の分析結果（西本1978）に基づいて、「漁撈文化」と性格づけることは、大塚和義氏（大井編1982）や前田氏（2002）の指摘にもあるように、総体としてのオホーツク文化の特徴を捉えているとは言い難く、前述したイエスナー氏の概念規定とともに、現実的な有効性に欠けると言わざるを得ない。

海獣狩猟とは、海獣類や海洋に関する豊富な知識の他、銚頭をはじめとする専用の道具類や航海術などの特殊な技術を要するきわめて高度な生業活動である。海獣類から得られる肉や毛皮が生活資源として重要であることは改めて指摘するまでもないが、海獣類の狩猟や解体、分配が集団で行われ、海獣類を対象とした儀礼を執り行う民族例の多いことからすれば（名取（1974）〔1940〕、Antropova1956a、更科源・更科光1976など）、そこには社会組織の存在や社会集団を維持するための象徴性をも認めることができる。以上のような文化内における海獣狩猟の実用的・精神的位置づけの高さからすれば、仮にそれが生業の主体を占めなくとも、文化圏全域で一定度以上に行われていることが認められる場合には、その文化を「海獣狩猟文化」とみなすことが可能であろう。この概念規定に照らせ

ば、サハリンから北海道にかけて海獣狩猟文化として確立を見るのはオホーツク文化のみとなる。なお、これに先行する続縄文文化や縄文文化でも、伊達市南有珠 6 遺跡（三橋編 1983）や礼文町船泊遺跡（北海道礼文町教育委員会 2000）のように、海獣類が多量に出土する遺跡が見られるが、両文化では内陸に所在する遺跡も多いことから、文化全体では高度に海洋適応を遂げているとはみなし難い。よって、本研究では、オホーツク文化全域で認められる海獣狩猟への依存性の高さが、同文化と他文化とを画する特徴であるとみなし、これを海獣狩猟文化の一つと位置づけた上で、論を進めることとする。

オホーツク文化の生業については、西本豊弘氏や大井晴男氏らによって動物遺存体の分析結果に基づく検討が進められている。図 2 は、礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）について西本氏（1978）が提示した生業カレンダーを、大井氏（1988）が各動物の供給するカロリー量を加味して作成し直したものである。なお、ここでは、利用率が不明なクジラや、利用時期の確定が困難な飼養動物は省かれており、出土量が少ない貝類や陸獣類も加えられていない。カロリー量という共通した基準に基づいて、遺跡全体の生業や食料資源としての各動物の価値を捉えようとするこの試みは、当時としては画期的なものであり、その後進められた同文化のセトルメント・パターンの復元（大場・大井編 1981、大井 1988、小野 1998）などに多大な影響を与えることとなった。ただし、西本氏や大井氏自身がすでに認めているように、これはいくつかの仮定の上に立って想定されたものであり、この仮定に大きな誤りがあれば、「砂上の楼閣」（大井 1988：475 頁）となる危険性を孕んでいる。以下に、方法論上で特に問題となる項目を列挙する。

- ①ウニ類の出土量を各魚骨層の半量と仮定し、その最小個体数を体積（ウニ殻 $1 \text{ m}^3 = \text{約 } 3 \text{ 万個体}$ ）から算出している点（註 3）。
- ②各魚骨層で採取されたブロックサンプル量が 350～6,000cc 程度と少なく、そこで見出された魚類の椎骨数から、遺跡全体の魚類の最小個体数を算出している点（註 4）。
- ③カロリー量を推定する際に仮定した各動物の「平均体重」や「可食肉率」などに妥当性が認められるか否か（註 5）。
- ④食料資源としてのクジラをどのように評価するか（註 6）。
- ⑤遺物として残存し難いイカやタコ、カニ、サケ・マス類、植物質食料などに対する利用程度をどのように評価するか（註 7）。
- ⑥各動物について推定された捕獲・採集時期に妥当性が認められるか否か（註 8）。

以上に列挙したように、この生業カレンダーには、さまざまな問題が内包されている。そのため、これに立脚して、季節性などについてさらに細かな検討を加えることはあまり生産的とはいえ、ここでは、複合的な生業が季節ごとに行われていたことを確認するにとどめたい。なお、この香深井 1 遺跡は、オホーツク文化を代表する遺跡の一つではあるが、礼文島という島嶼に所在することからも明らかなように、元来陸獣類が少ないという特殊な条件を抱えている。事実、北海道本島の遺跡では、ヒグマやエゾシカ、キツネなどの陸獣類の出土割合が、島嶼に所在する遺跡に比べて高い傾向にある。また、香深井 1 遺

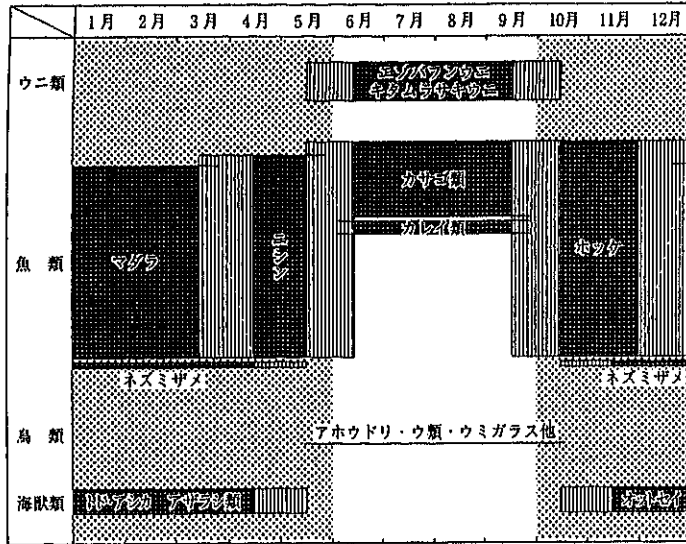


図2 香深井1遺跡における生業カレンダー（天野 2003b（原図:大井 1988））

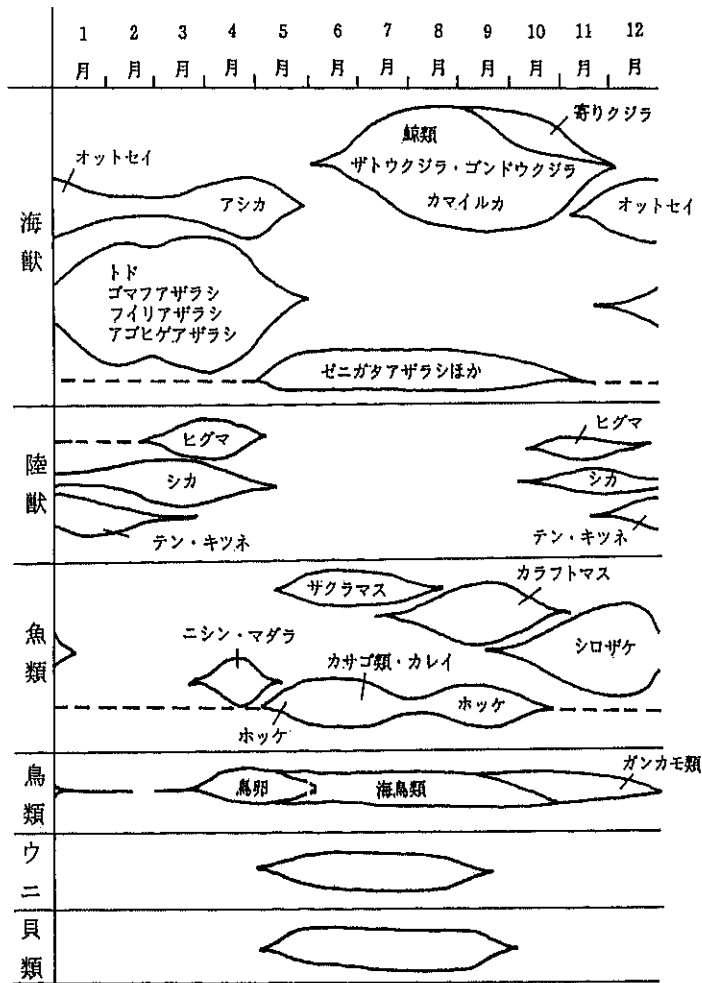


図3 オホーツク文化の生業カレンダー（大泰司 1983 にウニ類と貝類を加筆）

跡では出土量の少なかった貝類も、サハリン中部のプロムイスロヴォエ 2 遺跡のように、多量に出土する遺跡もみられるなど（内山 2002a、b）、生業の内容には、地域間もしくは遺跡間での変異幅の大きいことが明らかである。

図 3 は、大森司紀之氏（1983）が提示したオホーツク文化全体の生業カレンダーに、ウニ類と貝類を加筆したものである。この図から明らかなように、同文化の生業は、多様な動物種を季節ごとに利用することで成り立っている。ただし、ここに挙げられた動物種の全てが同文化圏内で一様に生息していたわけではなく、遺跡ごとに、周辺の自然環境や動物相に応じた狩猟・採集活動が個々に営まれていたものとみられる。そして、このことが、同文化における生業や季節性、捕獲・採集方法、それに係る道具類などに多様性を生じさせた要因であろう。

なお、先に掲げた図 2、3 の生業カレンダーは、各動物の「捕獲・採集時期」を示したものであり、民族誌時代に北方狩猟民の間で広く行われた保存加工（註 9）の存在を考慮すれば、「消費時期」とは必ずしも一致しない可能性がある。そのため、オホーツク文化期において、季節による食料資源の不均衡が存在したか否か、仮にそれが存在したとすればどの程度であったか、という問題については、食料保存という食生活上の重要な要素が具体的に検討されていない現段階では不明と言わざるを得ない。

3. 動物飼養研究の意義

サハリンから北海道にかけて分布したオホーツク文化は、海岸付近に居住地を定め、多様にある水産資源を季節ごとに利用するという海洋的な生活様式の中に、動物飼養を採り入れることにより、より一層複雑化した生業体系を形成したことで知られる。このオホーツク文化については、海洋適応の度合の高さに注目が注がれたことから、それに関わる検討が中心的になされる一方で、特異な経済基盤と認識された動物飼養（直良 1938、1941、Ohyi1975、大井 1981）については、積極的に検討されることが少なかった。しかし、後章において論じるように、動物飼養とは、一般の狩猟採集活動とは異なる人為的働きかけを要する生産活動であり、その導入によって既存の生業体系や生活体系に少なからぬ変容が促されたことは想像に難くない。そのため、オホーツク文化の生業体系の全体像を把握する上では、動物飼養の内容を体系的に検討していくことが不可欠といえよう。また、前述したように、一般に狩猟採集経済下の生業活動が概ね直接的に周囲の自然環境に如何に適応するかの問題であるのに対し、動物飼養はそれとは別の背景で利用されるに至ったものであり、自然環境の差異を越えて普及している部分がある。すなわち、動物飼養の有無や、飼養する動物種、飼養方法、文化内での位置づけなどには社会的要因が強く反映されているとみなすことができるのである。そして、このことから、動物飼養の検討を通じて、それを採り入れた海獣狩猟文化の特質や文化内における地域間関係に言及することが可能と

なる。さらに、本研究で取り上げる飼養動物の中には、一般に「カラフトブタ」と呼称されるイノシシ類のように、サハリンと北海道には本来野生種が生息せず、周辺文化との接触によって採り入れられたことの明らかな動物も含まれる。オホーツク文化は、大陸的色彩の濃い文化として知られており、これまでも、金属器を中心とする「大陸系遺物」の検討に基づいて周辺文化との関係が盛んに論じられてきたが（菊池 1976、山田他 1995、高島 1998 など）、動物飼養という生業は生活に密着した文化要素の一つであるため、他の物質文化とは異なる視点から周辺文化との関わりを見出すための好資料となろう。

以上の視点に立って、本研究では、オホーツク文化において、これまでに飼養されたと指摘されたことのあるイヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマ（註 10）を取り上げ、それぞれの遺存体に加え、その骨や歯牙、角を素材として製作された製品、これらの動物を模した各種素材からなる動物意匠遺物の分析を通じて、利用内容と価値の復元を試みることにした。そして、その上で、海洋的な生活様式の中に動物飼養という生産活動が採り入れられた時期や地域、普及した過程、果たした歴史的役割などについて検討を加えることとする。

海獣狩猟文化が顕著な発達を遂げた背景については、従来、高度に海洋適応を遂げたことによる水産資源の効率的な利用や、周辺文化との接触による金属器の流入が要因とみなされてきた。しかし、北東アジアのような寒冷な環境下では、飼養動物の導入による複合的な生業体系の出現が、生活の安定的な維持に寄与した可能性は高く、従来見逃されてきた海獣狩猟文化の発達要因の一つであったといえる。本研究では、以上の視点を持って、主題である海獣狩猟文化における動物飼養の歴史的意義について、考古資料に基づいた実証的方法による検討を試みたい。

註

- (1)オホーツク文化の分布範囲は、図 1 に示したように、千島列島にまで及ぶが、動物利用の内容を復元する上で欠かせない動物遺存体などの報告例が限られているため、本研究では対象地域に含めなかった。
- (2)民族名は、「族」や「民族」を付けずに表記した。
- (3)この方法では、ウニ殻のみの体積を求めることが難しく、また、ウニ殻の大きさや破碎の程度によっては、体積と個体数の比率が異なってくる可能性が高い。ウニ類の最小個体数の算出には、顎骨と中間骨の出土数を数えることが有効である（内山・辻村 2001）。
- (4)魚骨層 I を例にとると、この層のブロックサンプル（350cc）中から、ニシンの椎骨は 33 個しか認められなかったが、それに基づいて推計された層全体に含まれるニシンの椎骨数は 50 万個以上、最小個体数は 9,530 個体と算出されている。
- (5)海獣類では、可食部分は肉のみとし、皮下脂肪は含まれていない。また、全ての動物で、内臓や脳、骨髄などは、可食部分に加えられていない。

- (6)香深井 1 遺跡は、オホーツク文化の中でも、とりわけクジラ類の出土量が多い遺跡である。クジラ類に対しては、寄りクジラ（負傷し、または死亡して岸に漂い寄ったクジラ）が多く利用されたのではないかとの見方（大場・大井編 1981、大井 1984）がある一方で、その積極的な捕獲を認め、さらに遺跡内へは肉のみが持ち込まれることも多かったとし、遺存体の出土量以上の価値を見出そうとする見解もある（大森司 1983）。また、種市幸生氏（2000、2003）のように、クジラ類の捕獲をもってオホーツク文化の成立とみなす見解までであるが、クジラ類の出土量が多い遺跡は他にみられないため、同文化を規定する概念とは認め難い。
- (7)このうち、特にサケ・マス類については、骨が比較的軟質で食することが可能なため、残存し難かったものとみなし、その利用を積極的に評価する見解がある（大森司 1983）。また、植物質食料については、検討できる資料が限られていることと、その利用程度が比較的少なかったと予想されることから（大井編 1982、大井 1988）、本研究では除外した。
- (8)歯の成長線分析が試みられたオットセイ（大井他 1981）やヒグマ（大井他 1980）以外の動物の捕獲・採集時期は、現代の漁期や回遊ルートなどに基づいて推定されている。ただし、この時期については、研究者間で意見の一致をみていないものもある。例えば、産卵個体群を対象としたマダラ漁については、図 2 では 1、2 月を中心とする時期と想定されているが、回遊ルートや漁師への聞き取り内容（小竹 2003）から初春と見る見解がある（大森司 1983、内山 2001）。また、同じく産卵個体群を主たる対象としたホッケ漁は、その産卵が北海道周辺で 9 月中旬～12 月中旬頃に行われ、北に早いとされることから（鳥澤 1991）、礼文島では 9 月に行われた可能性もある。さらに、図 2 の中で 10～5 月が漁期とされているネズミザメも、現在、北海道近海で 6～8 月に漁獲されることからすれば（吉田 1991）、夏と見るほうが妥当だろう。これらに基づけば、香深井 1 遺跡で夏季を中心とする時期（6～9 月）と冬季を中心とする時期（10～5 月）のカロリー量の較差（大場・大井編 1981、大井 1988、小野 1998）は、ほとんど認められなくなる可能性もある。
- (9)アムール河下流域からサハリンにかけて居住したニブフの集落では、夏、家の周りに、干し魚を吊した棒がめぐっていたという（ivanov et al.1956）。また、アイヌの例でも、越冬用や飢饉の際の非常食として、魚や獣の肉を戸外で天日干しにし、さらに屋内の火棚の上で乾燥させる保存加工が行われていたことが知られる（アイヌ文化保存対策協議会編 1969）。オホーツク文化期に保存加工が行われたことを示す考古学的証拠はないが、その可能性は無視できない。この問題について西本氏（1984a）は、飼養動物の「飼料としての魚類の保存技術は確立していた」（123 頁）可能性を指摘している。一方、大井氏（1978）は、「乾蔵のためには豊漁期である冬期は不適であろうし、塩蔵は考え難く、燻製による保存は可能であってもそれほど多量の貯蔵は困難であると思われる。つまり、少なくともこの場合には、貯蔵の問題はほとんど考慮する必要がないものとする」（109 頁）と述べている。
- (10)この他に、ネコやサルなどについても、飼養の可能性が指摘されたことがあるが（北構 1940、直良 1972、天野 2002）、出土例数が限られていることや出土状況が必ずしも明確ではないことから、本研究の検討からは除いた。